

# SERIES ~日本生理学会の100年~

## 【第9回】 これからの生理学会~次世代の育成~

香川大学医学部自律機能生理学  
(日本生理学会副理事長・庶務担当)  
平野 勝也

新型コロナウイルス感染症が国内でも認められ始めた2020年3月、石川義弘理事長のもとこれまで経験のない立場から学会に関わる機会をいただきました。新体制発足当初から学会のさらなる発展を期して石川理事長が掲げた主な課題は、次世代を担う若手を含めた会員の減少と評議員の高齢化でした。これは日本のアカデミア全体が共有する課題でもあり、かつては米国生理学会も直面した課題でもありました。米国生理学会は、それまでの研究中心の姿勢から生理学教育の領域も取り入れた拡大路線をとることで課題を克服した実績があったようでした。私たちは将来計画委員会など関連委員会と連携して生理学会なりの解決策を模索して参りました。

学会の発展には、学部生、大学院生さらに若手研究者がより多く入会し、そのまま継続して学会活動に参画してもらうことが基本であり、そのためには学会の学術的魅力を高くかつ頑強に維持することが根幹をなすことは言うまでもありません。一方、若手研究者を顕彰し、奨励することもより現実的な方策として重要な役割を果たします。日本生理学会では、生理学会奨励賞、入澤宏・彩記念若手研究奨励賞、入澤宏・彩記念JPS優秀論文賞、入澤彩記念女性生理学者奨励賞などの学会賞を設け、若手研究者の顕彰を行っています。また、会員委員会の尽力により2022年3月には臨時会員のなかにジュニア会員を新設し、アウトリーチ活動として小中高生の頃から生理学に親しむ機会を提供し、これからの日本のアカデミアを担う次世代の育成にも取り組んでいます。

若手研究者、特に学生会員の入会のきっかけとなる重要な機会が地方会です。地方会への取り組みは地方会によって温度差があり、また、学会が設立された100年前とは格段に異なる次元に交通通信手段が発達した現在、地方会の在り方自体を見直す考え方もありますが、大会とは異なる地方会の大きな役割に若手研究者の育成があります。現在、多くの地方会で優秀発表賞など若手研究者の顕彰が行われています。私が所属する中国四国地方会では、20年以上前から先達の尽力によって若手研究者の育成に注力しています。地方会独自

の優秀発表賞制度が整えられており、昨年度からは研究職への指向が強く、学部および修士時代に研究活動に継続して高い実績を上げる学生を表彰する「中国四国地方会次世代研究者表彰」制度が立ち上がりました。これらのことは、第99回仙台大会での地方会主催シンポジウムで報告したところです。日本生理学会では、これらの地方会の取り組みを資金的に支援する制度として「地方会における若手研究者顕彰費用の支援に関する申合せ」を、第100回記念京都大会の理事会で決定し、2023年度から地方会の支援を開始しました。若手研究者の登竜門としての役割の大きな地方会がより活性化され、学会の活力が増大することを祈念いたします。

次世代を担う若手研究者も含めて会員の増加を図り、学会のさらなる発展を促す中で理事会の見直しも議論されています。理事会は、日本生理学会の運営に最重要な役割を果たす法的根拠を持った学会の組織です。ところが、理事会構成員の属性が会員の属性を適正に反映していないことが指摘されています。理事会の見直しの一つとして、一定数の会員がいながら現在の理事会に反映されていない分野・領域や、会員数は少なくとも学会の将来を見すえて重点を置くべき分野・領域を定めて特別幹事を選抜することが、京都大会での理事会で承認され、第101回北九州大会での理事選任に向けて手続きが進められているところです。

石川理事長のイニシアティブのもと開始された学会発展プロジェクトはその速度を増しています。2025年3月に予定されている解剖学会、薬理学会との3学会合同大会の開催は、学会を飛び出したアカデミア全体の活性化に貢献するものと思います。さらに、2026年3月の大会は女性研究者だけで大会長を務める初めての大会となります。日本生理学会も新たな100年の一歩を歩み始めたことが実感されます。サイエンスは、巨人の肩の上に立って将来を見渡すことを積み重ねることで、一步一步発展してきました。2024年3月からは久保義弘理事長にバトンが渡り、新たな体制のもと学会のさらなる発展が図られることと期待します。